



「秋への思い」



秋といういつも思い出す俳句があります。明治の俳人正岡子規の詠んだ、

柿食へば 鐘が鳴るなり 法隆寺

(柿を食べているちょうどその時、法隆寺から鐘の音が聞こえてきた。)

という俳句です。みなさんもどこかで聞いたことがあるのではないのでしょうか。法隆寺の鐘の音を聞きながら、柿の甘さ、おいしさを味わうという句意だけでなく、一つの俳句の中に、柿という季語から来る季節感、法隆寺という古代からの歴史、そして今作者がいる秋の中のたたずまい、そんな様々な要素が一体となって感じられる名作ではないのでしょうか。

この他に秋を表現する俳句で好きな句が、もう一句あります。江戸時代の俳人小林一茶の、

名月を 取ってくれろと 泣く子かな

(秋の美しい名月を、届くはずもないのに子どもが取ってくれとせがんで泣いている。)

という俳句です。まだ幼い我が子への親の情愛にあふれたこの俳句も、みなさんは聞いたことがあるのではないのでしょうか。

直截ちよくせつで分かりやすい表現は、多分、多くの人々の心に訴える力があつたのではないのでしょうか。

この二つの俳句に共通しているのは、理屈や難解な言語で装飾された俳句ではなく、一見、誰もが作ることが出来そうな俳句だという点です。誰もがそう思うということは、いつの時代にも通用する普遍性ふへんを持ったものだと言えるのではないかと思います。この二句はこれからも親しみのある名作として、味わい継がれて行くのではないのでしょうか。

秋は俳句だけではなく、芸術上の様々なジャンルで名作を生み出しています。たとえば、フランスの詩人ポール・ヴェルレーヌの『落ち葉』という詩も、秋をしみじみと感じさせてくれる名作ではないのでしょうか。

秋の日の ヴィオロンの ためいきの 身にしみて ひたぶるに うら悲し。

(秋の日に聞こえてくるバイオリンのため息のような音が、身に染みてひたすらにも悲しくなってくる。)

バイオリンの消え入るような音に心を傾けている作者の様子が、眼前に浮かんでくるようです。秋という季節は、国別を問わず、時代を問わず、いつも人々の心に優しい感情を与えてくれるのではないかと思います。

深まりゆく秋の中で、冬の訪れを聞く前に、秋の名残りを求めて、自然に親しむ旅に出てみるのもいいかもしれません。また、遠い名所を訪れなくとも、近くの公園を彩る木々の中に、秋の情緒じょうちよを感じるのもいい体験ではないのでしょうか。

秋をいとおしむように、じっくり味わってほしいと思います。